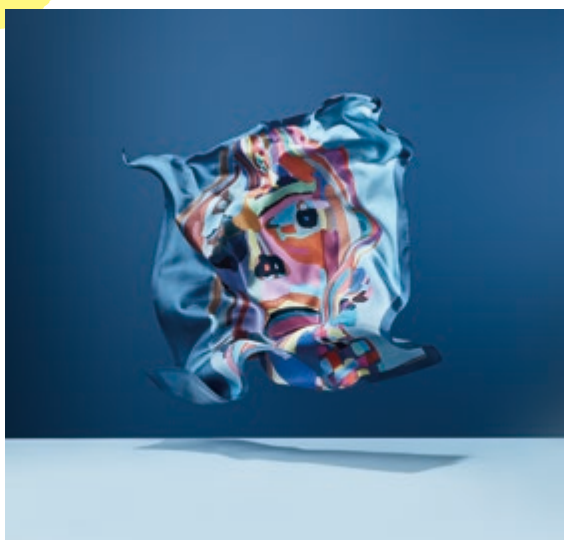


道徳 ジャーナル

130号

- 21世紀 心の時代に
ブランドでしか、届かない教室がある。
松田崇弥……………1
- 道徳授業 私の実践
・道徳×他教科・領域で相乗効果を目指す
根岸陽月……………4
- ・学習テーマ×学級経営
藤永啓吾……………6
- 浅見先生に相談です！
「中心発問」はどれにすればいいの？
浅見哲也……………8
- どうなるこれからの道徳授業……………10



ヘラルボニーの商品

株式会社ヘラルボニーは、『異彩を、放て。』をミッションに、障害のイメージ変容と福祉を起点に新たな文化の創出を目指す、岩手県発のクリエイティブカンパニーです。

ブランドでしか、
届かない教室がある。

21世紀
心の時代に

教室の中の小さな連帯

中学校の教室で、こんな言葉が飛び交っていた。
「おまえ障害者かよ（笑）」

誰かがそう言う。周りが笑う。空気が少しだけ軽くなる。標的になった誰かの尊厳と引き換えに、教室の中に小さな連帯が生まれる。

私は、その場にいた。

私には、重度の知的障害を伴う自閉症の兄がいる。兄の名前は翔太という。その言葉が胸に刺さっていた。

笑えるはずがなかった。怒りたかった。「やめろ」と言いたかった。でも、言えなかった。

その場で怒れば、今度は自分が標的になるかも。そう思うと、私は何も言えなくなった。

笑った。心を無にしながらヘラヘラと笑った。



株式会社ヘラルボニー 代表取締役

まつだ たかや
松田崇弥

あの日、私は麻痺した

当時、私の周りでは「スぺ」という言葉が流行っていた。自閉スペクトラム症を揶揄するように使われていた言葉だ。

「あいつスぺじゃね？」

「それ、完全にスぺだろ」

そんな言葉が冗談のように教室を飛び交っていた。兄のことを思い出すたびに、胸の奥が縮んだ。でも私はやはり、笑っているふりをしていた。

それを、何度も繰り返し返すうちに、だんだん本当に笑えるようになっていった。それは成長ではなかった。処世術でもない。麻痺だった。

人は、苦しい空気に居続けると、苦しさを感じないように自分を変えてしまう。自分の大切なものを守るために、大切なものを裏切ることがある。

私は兄の存在を隠した。兄のことを話せなくなつた。家族の話題になると曖昧に答えた。自分の近くに障害があることを知られるのが怖かった。

その頃の私は、強くなりたかったのではない。ただ、標的になりたくなかった。

中学校という小さな社会には、残酷な力学がある。弱い誰かを標的にすると、仲間ができる。誰かを笑うことで、笑っている側の結束が強まる。敵をつくると、味方が生まれる。

もちろん、それは中学校だけの話ではない。会社

にも、地域にも、家庭にも、社会にもある。でも、教室ではそれがあまりにもむき出しだった。

友人は、クラスの人気者だった。明るく面白く、人を惹きつける力があつた。彼はよく言っていた。

「おまえ障害者かよ（笑）」

彼は悪魔のような人間だったか。そう聞かれたら、私は違うと思う。

彼もまた、何かを抱えていたのだと思う。言葉にからない孤独を埋めるために、誰かを下に置く必要があつたのかもしれない。

障害のある人を笑いものにする空気は、特別に邪悪な人だけが生むものではない。その場にいる沈黙がつくる。笑ってしまう私のような人間がつくる。

だからこそ、今も思う。誰一人として、麻痺することのない社会になると良い。

ブランドでしか、届かない人がいる

二十四歳のときだった。自閉症に関するセミナーに参加した。会場で、一枚のポスターを見た。そこに、ある作品が載っていた。美しかった。ただ、作品より先に、ある言葉が目に入った。

「障害者アート」

その瞬間、胸の奥がざわついた。

なぜこの言葉が必要なのだろう。なぜ作品そのものよりも先に作者の属性が立ち上がるのだろうか。

「女性アート」とはあまり言わない。「外国人ア

ート」とも言わない。でも、「障害者アート」という言葉は、あまりにも自然に使われていた。

作品は、ただ美しかった。目の前にある線や色が、強かった。

「かわいそうだから見てあげよう」ではなく。ただ美しいものとして扱う。その当たり前のことが、当たり前にされていない。そこに対する怒りが、ヘラルボニーの出発点の一つになった。

けれど、どうすれば届くのか。

福祉に関心のある人にだけ届いても、社会は変わらない。アートが好きな人にだけ届いても、あの教室の空気は変えられない。

閃いた。届けたいのは中学時代のある同級生だ。彼は、福祉施設の扉を自分から開ける人間ではない。啓発ポスターを立ち止まって読む人間でもない。「障害のある人の表現を見に行こう」と言えば、きっと当時は笑ったと思う。

でも彼はブランドの財布が好きだった。高級車が好きだった。ヒップホップのエミネムが好きだった。

ブランドだったなら、彼にも届くのではないか。

かっこいいシャツ。美しいスカーフ。持ちたくなるバッグ。誰かが電車で身につけていて、隣の人が「それ何？」と思うもの。

入り口が福祉でなくてもいい。入り口がアートでなくてもいい。入り口は、憧れでいい。美しさでいい。欲しい、と思う気持ちでいい。そこから初めて誰が描いたのかを知る。その人の背景を知る。無意

識に引いていた境界線に気づく。

ヘラルボニーがブランドである理由は、戦略というより必然だった。

ブランドでしか、届かない人がいる。いや、ブランドだからこそ、届く心がある。私にとって、それは中学校の教室から生まれた答えだった。

ヒップホップも、同じことを教えてくれた。

ヒップホップの根底には、逆境を力に変える精神がある。貧しさ。差別。孤独。地方出身であること。社会から貼られたラベル。それらを、マイクの前で武器に変える文化がある。

社会的に正しいことを言っているだけでは、人は振り向かない。良いコトの前に、良いモノでなければ世界を動かすことはできない。

障害のある作家の表現を、福祉ではなくアートとして世界に出す。支援の対象ではなく、ブランドの中心に据える。それは、私にとってヒップホップの感覚にも近かった。「障害」という言葉の周辺にあったものを価値へと変える。それはきれいな物語ではない。もっと泥臭い。個人的な怒りに近い。

私は、あの教室に戻りたかったのだと思う。

あの日、笑ってしまった自分。兄の存在を隠した自分。標的になることを恐れて、標的をつくる側に回った自分。

その自分に対して、別の言葉を渡したかった。

兄の存在は、隠すものではない。障害は、笑いの道具ではない。表現は、同情されるものではない。

美しいものは、美しい。

人は変わる。教室もきつと変わる。

私は、過去を美化するつもりはない。

笑ってはいけない場面で笑い、止めるべき言葉を止めず、兄の存在を守るために、兄の存在を隠した。その事実も、消えない。

でも同時に、私は信じている。人は変わる。

いまの社会は、ときに一度の過ちで人を決めつける。もちろん、傷つけた事実を軽く扱ってはいけない。被害を受けた人の痛みを置き去りにしてはいけない。けれど、人を固定してしまうことにも、私は怖さを感じる。

「あの子はそういう子だから」

その言葉が、子どもを本当にその場所へ閉じ込めてしまうことがある。

教室には、誰かを笑わせることでしか、自分の居場所をつくれないう子がいる。強い言葉を使わないと、不安を隠せない子がいる。

その子を、罰するだけでは届かないことがある。

人を傷つける言葉は、止めなければならぬ。でも、止めるだけではなく、見つめる必要がある。

その言葉の奥に、何があるのか。その笑いの奥に、どんな寂しさがあるのか。その攻撃性の奥に、どんな不安があるのか。先生方は、毎日その問いの前に立っているのだと思う。

兄の翔太には自閉症特有の強烈なこだわりがある。それは、矯正すべき偏りではない。兄の世界の中心にある、大切な輪郭だ。

社会はよく「みんな同じ」をやさしさの言葉として使う。でも、その「同じ」が、一人ひとりの必要を見えなくしてしまうことがある。

教室でも、同じかもしれない。

少し違う歩幅の子がいる。少し違う言葉で世界を受け取る子がいる。その違いを「問題」としてだけ見るのか。その子の「輪郭」として見るのか。

まなざしひとつで教室の空気は変わるのだと思う。

ヘラルボニーが本当に届けたいのは、福祉に関心がある人だけではない。アートが好きな人だけでもない。中学時代の、あの同級生だ。

「おまえ障害者かよ(笑)」と言っていた彼。その言葉で誰かを傷つけながら、自分自身も何かに傷つけていたかもしれない彼。美術館には行かなくても、ブランドには反応する彼。啓発には耳をふさぐかもしれないが、かっこいいものには心を動かす彼。どの教室にも、きつと彼はいる。

問題は、彼がいること自体ではないのだと思う。彼をつくっている空気がある。その空気に迎合して笑ってしまう子がいる。その笑いの中で、自分の大切な家族を隠している子がいる。

かつての私のように。

(まつだ たかや)

道徳授業私の実践

道徳×他教科・領域で

相乗効果を目指す

はじめに

私は、毎時間子どもたちと共に楽しく道徳科の授業を行っている。子どもたちの問題意識を発問につなげ、一人一人がよりよく生きるための考えを深めている姿を見ると、心がわくわくする。さらに、子どもたちの思いから私自身も考えさせられたり、学びを得たりする。その経験の積み重ねが道徳教育を研究したいという原動力になっている。

こうした授業での深まりを基盤とし

ながら、現在は道徳科と他教科・領域を関連させることで相乗効果を生み出せるのではないかと考えている。

ここでいう相乗効果とは、道徳科のねらいや目標を達成しつつ、他教科・領域と関連させることで、より関心や意欲を高めたり、新たな問題意識へとつなげたりする姿が見られることである。もちろん、道徳科で学習したことがすぐに日常生活につながる訳ではない。即効性ばかりを求めることは望ましくないが、子どもたちにとってプラスになる学びもあると考え、関連を図った授業を展開していく必要がある。

相乗効果を目指すにあたって

現行の学習指導要領において道徳科の年間指導計画を作成する際には、各教科・領域との関連を考慮するように記載されている。実際、この方針に沿って、関連させて指導するように多くの先生が経験されていることである。

しかし、計画上関連させたとしても実践では生かしきれなかったり、教師が強引につなげてしまったりすることもある。加えて、そもそもどの



東京都立川市立
若葉台小学校
主任教諭

根岸陽月

ように関連させて考えたらよいのか悩むこともあるだろう。（私自身も同様の経験がある……）

関連を通して、それぞれの目標を達成しつつ、児童にとってより考えが広がったり、学びが深まったりする学習活動を目指し、単元を構想した。

単元について

所属校がある東京都立川市には、「立川市民科」という独自の教科が存在し、概要は左図の通りである。

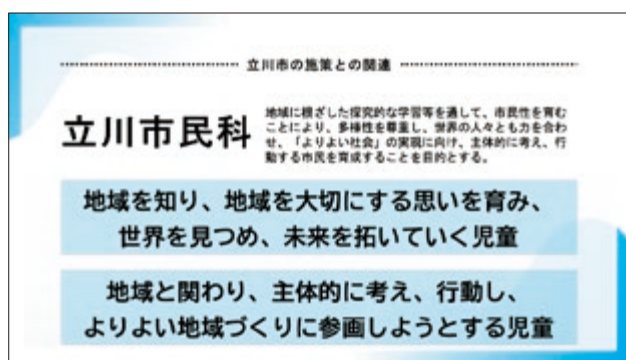


図1 立川市民科の概要

まず、立川市民科の大きなテーマを「わかばちくにすんでいる人をハッピーにしよう!」と設定した。その大きなテーマを基に、「他学年との交流」「高齢者との交流」「園児との交流」の三つの活動を取り入れた。そして、それぞれの活動に道徳科を関連させるこ

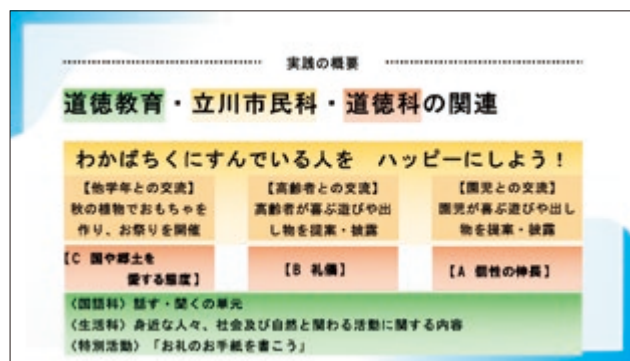


図2 今回の単元の構想図

今回実践を紹介する第一学年では、生活科の時間の一部が立川市民科に移行されている。そこで、一年生なりに自分の地域にどのような人がいるのかに焦点を当て、複数の教科・領域を関連させ年間計画を設定した。

とで、活動に対する関心をより高めたり、道徳的価値等の理解を深めたりすることをねらった。その他、国語科や生活科、特別活動も目的に応じて関連させた。

授業の実際

「他学年との交流」の単元では、道徳科に「はっぱのじゅうたん」(自作教材)を設定した。生活科の秋のおもちゃ作りをする上で、紅葉やそれを親しんできた日本の文化がより実感できる道徳授業を目指した。授業では、登場する男の子が紅葉を鑑賞しているときの気持ちを考えたり、昔から紅葉が親しまれている理由を話し合ったりした。その中で子どもたちは「お正月もじゃない?」と、日本には古くから大切にしているものがたくさんあることに気付くことができた。この道徳科での気付きがきっかけとなり、生活科の単元では、「やっぱり紅葉って不思議だな。」「もっと他の人とも紅葉を楽しみたいな。」という意見が次々と挙がった。そして、秋の植物を使ったおもちゃを作り、他学年を招待してお店を

開く活動へと、授業がどんどん展開していった。

「高齢者との交流」の単元では、先に市民科の活動を進めた上で、道徳科の高齢者との挨拶を扱った教材「ぽっかぽか」を設定した。すでに子どもたちは、高齢者の方がハッピーになるような出し物やプレゼントの準備に取り組んでいたが、道徳科で礼儀について扱うことで、高齢者の方との関わり方にも意識を向けさせることができた。

導入では、出し物の練習風景やプレゼント作りの様子の写真を見せ、どんな思いで頑張っているのかを問いかけた。「お年寄りの方に喜んでほしい。」「ハッピーになってほしい。」という思いが共有できた。教材を読んで、登場人物の行動の変化に気付いたあと、

「もし、言葉を変えていなかったらどうなっていたらろう。」と問いかけ、礼儀は自分も相手も心が温かくなるものだと考えることができた。その上で「高齢者の方と会ったとき、丁寧な言葉や挨拶は足し算したほうがいい?」と問いかけると、「足したらもっとハッピーになる。」「緊張するけど言ってみよう。」「実践意欲が高まっている様

子が見られた。このように市民科での具体的なアクションがあったおかげで、礼儀への価値理解がより深まった。高齢者の方との交流において、道徳科の学びがどのように生きたのか直接目に見えないものの、互いにすてきな時間を過ごすことができた。

「園児との交流」の単元では、あらかじめ交流することを伝えた上で、道徳科の「大すきだから」(やなせたかしさんの伝記)を設定した。好きなものをとことん続けることの大切さに共感し、自分の好きなことを深く考える授業となった。そして、その経験を園児との活動に生かすことで、目的のある有意義な交流となった。

おわりに

関連的指導について述べたが、過度な関連や、年間計画に則っていない無理な関連にならないように留意したい。相乗効果を意識して、学校ごとの特色、児童の実態等に応じて、積極的に関連させ、子どもたちの生きる力を高められる教員でありたい。

(ねぎし ようげつ)

道徳授業私の実践

学習テーマ×学級経営

学習テーマと学級目標

学習テーマとは何だろうか？

学習テーマとは、授業の軸となるものです。軸とはモノとモノを連結させるはたらきをしますが、道徳科の授業においては、先生と子どもを、子どもと子どもを、教材と子どもを……といったように、それぞれの考えを連結させるはたらきがあります。

私が考える学習テーマとは、『学習

指導要領解説』で示されている主題（ねらいと教材で構成した、授業の内容が概観できるもの）と同意のものであり、次のように捉えています。

ねらいと教材をつなぐもので、授業全体をイメージできる一言

例えば、ねらいと使用する教材が「勤労」に関わる授業であれば、「勤労」というように一言で表します。ただ、言葉選びについては、内容項目のキーワードではなく、教材内容の言葉を用いるほうが、子どもたちの心に



山口県立岩国高等学校
附属中学校教諭

藤永啓吾

残りやすいと感じています。例えば、「掃除の神様が教えてくれたこと」（『新版 中学生の道徳 明日への扉 1』学研）には、「掃除」という言葉が幾度となく登場し、それがとても印象に残ります。その場合、この教材を使用する際には「掃除」を学習テーマとして授業をつくりまします。なぜ一言だけなのかというと、中学生は、具体的に示さずとも、今までの経験を想起して、その一言からさまざまなことを容易に連想することができるところです。先ほどの「掃除」を学習テーマとした場合、そこから、掃除に込める思い、

込められた思い、普段の掃除の在り方を容易に連想できます。

さて、ここからが本題です。学習テーマを「掃除」として授業を行った後、子どもたちの心の中には「掃除」が残ります。別の言い方をすると、「学習テーマ」が心に残ります。これを学級経営につなげていきます。

具体的にどこにつなげるかというと、学級内で意識する週目標にです。多くの場合、学校には、学校教育目標、学年目標、学級目標等があります。ただ、これらの目標は長期間を通じた目標なので、日々の活動を考えて、それらを具体化する必要があります。その方法の一つが週目標です。この週目標と道徳科の学習テーマをつなげるのです。

流れは次の通りです。

- ①道徳科の授業で、学習テーマを軸に子どもたちの心を育む。
- ②その日の帰りの会等で、学習テーマを基に、子どもたちと学級の週目標を決める。

週目標例

- ・掃除にどんな心を込める？
- ・掃除の神様になるには

・掃除の神様になろう
・掃除から広がる環境づくり

③翌日から、朝の会で目標を確認し、一日を過ごし、帰りの会で振り返りを行う。

このように、道徳科の授業（学習テーマ）をすぐに学級経営につなげることで、道徳的实践に結びつきやすくなり、より実りのある道徳科及び学級経営を行うことができます。

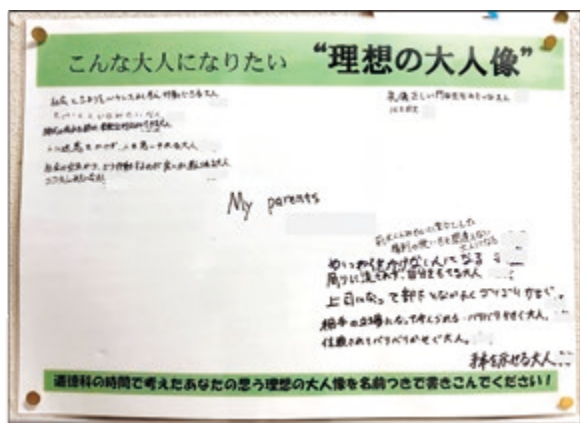
また、週目標を決めた後の教師の働きかけも大切になります。具体的には子どもたちの言葉や行動等について、週目標（道徳科の学習テーマ）を基に価値付けます。例えば、休み時間に子どもたちが教室を整えているのを見たならば、「わあ、掃除の神様がいますね。ありがとうございます。」と声をかけます。あるいは、清掃時間に黙々と頑張っている姿を見たならば、清掃後に、「その姿がまさに掃除の神様だよ。すてきな環境をつくってくれてありがとうね。うれしいよ。」と声をかけます。この小さな一声一声が価値付けであり、道徳科の授業が学級経営に生かされる瞬間でもあります。一週間を通して多くの価値付けをしていきたいものです。

学習テーマと掲示物

道徳科の授業を掲示物に活用している学校も多いでしょう。例えば左の掲示板を見てください。



よくある掲示板ではありますが、下部に掲示しているものに注目してみてください。左は拡大したものです。



この掲示板の作成基となる授業では、学習テーマを「理想の大人像」とし、理想の大人とはどんな大人なのかということを考えました。授業の中ではさまざまな問いや考えが飛び交い、50分では収まりきらない時間となりました。そのため、伝え足りない子ども、もっと伝えたいと思う子どもに向けて、それぞれが書き込める形式で掲示板を作成しました。

すると、数日後には寄せ書きのようになり、道徳科で語り合ったこと以上の内容が溢れていました。このようなちょっとした工夫も、学級経営を豊かにしていきます。



道徳科の授業をつなげる

明日の道徳科の授業が不安だ、自信がないな……と、日々頭を悩ませている先生もいらっしゃるかもしれません。そのような方こそ、道徳科を学級経営とつなげてみませんか。「つなげる」というのは、ベテランの先生からすると当たり前のことなのかもしれませんが、意図的に、そして計画的に行う必要があるため、少し労を要するかもしれません。ただ、実際に取り組んでみると、その効果が非常に大きいことが分かります。

学習テーマを軸に道徳科の授業を行うと、テーマ数は35となります。この学習テーマを基に学級の週目標をつくと、当たり前ですが35の目標をつくることができます。その内容は自分自身から生命まで多種多様です。ということは、学級経営も多種多様な視点から行うことができるということです。ぜひ、よりよい学級経営に向けて、実りある道徳科を大切にしてください。

（ふじな けいこ）

浅見先生に 相談です!

第8回



十文字学園女子大学教授

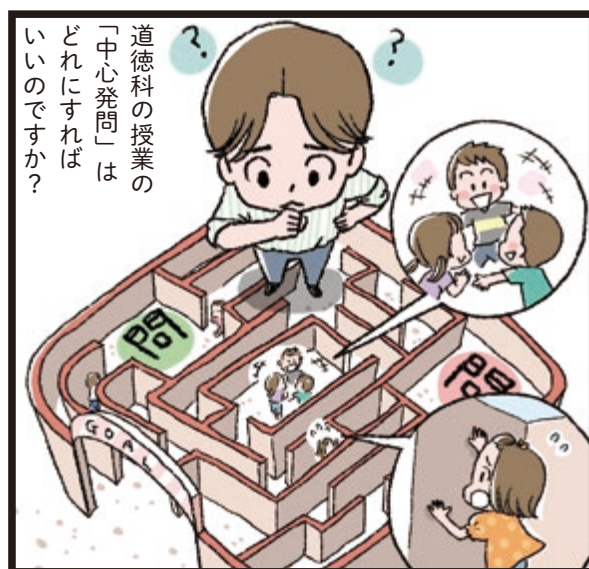
浅見哲也

「中心発問」はどれにすればいいの?

「他者理解」から「価値理解」に向かうところで
「タメ(溜)」をつくりましょう。



マンガ・春原弥生



発問の工夫による授業改善

「考え、議論する道徳」を視点とした道徳科の授業のさらなる質的転換が求められ、今日では「転換」のフェーズから「実装」のフェーズへと移行することが強く求められています。そのため、子どもたちがしっかりと道徳的価値に根差した問題意識を持てるようにし、その問題について話し合い、道徳的諸価値について考え、議論できるような深い学びのある授業にしていかなければなりません。そのためにも重要なのが教師の問いかけ、発問の工夫です。

道徳科の発問は、その役割から「基本発問」や「補助発問」、「中心発問」(『学習指導要領解説』では「中心的な発問」と表記)に分類され、学習指導案の学習指導過程上には、教師が子どもたちに投げかける発問の言葉を明記し、文頭に、中心発問は◎、基本発問は○、補助発問は※などの印を付けて表記することが広く行われています。

そのときによく話題になるのが「中心発問はどれにすればいいのですか?」ということです。みなさんは何を根拠に中心発問を決めていますか。

中心発問はどれにする?

道徳科では、主に「展開」の段階で教材を活用し、登場人物に自分を重ねて考えられるような発問

をしていきますが、その発問の意図は、ねらいとする道徳的価値の理解と深く関わっています。道徳的価値は大切だと分かっているにもかかわらず実現することができない人間の弱さなどを理解する「人間理解」。道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるということを前提として理解する「他者理解」。人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解する「価値理解」。これら三つの理解を通して道徳的価値の意義や大切さを理解していくことから、この三つの理解を意図した発問を構成して授業を行うことが一般的に行われています。

例えば、教材『心と心のあく手』（内容項目「親切、思いやり」）でしたら、次のような発問構成が考えられます。

○せつかく声をかけたのに断られて、ぼくはどんな気持ちになったのでしょうか。「人間理解」

○おばあさんの後を歩きながら、ぼくはどんなことを考えていたのでしょうか。「他者理解」

○おばあさんが家にたどり着くのを見届けて、ぼくはどんな気持ちになったのでしょうか。「価値理解」
これらの三つが基本発問となります。さて、この中で中心発問を選ぶとしたらどれになるのでしょうか。解説の中では「中心的な発問」とは「授業のねらいに深く関わる」と説明されているだけで、それ以上の定義はありません。そこで、中心発問を二つの考え方で定義づけてみました。

・その授業で最も時間をかけて話し合うためのきつかけとなる発問

・その授業で最もねらいに迫れるようにするためのきつかけとなる発問

これらの意図が一つの発問に集約できれば迷いはないのですが、前者の場合には「他者理解」が中心発問、後者の場合は「価値理解」が中心発問になります。

「考え、議論する道徳」の実装に向けた表記の工夫

私は、道徳科をさらなる深い学びに誘い、ねらいとする道徳的価値を理解にとどまらず、しっかりと自覚できるようにするためにも「人間理解」→「他者理解」→「価値理解」という思考のルートを基本としながら、特に「他者理解」から「価値理解」に向かうところで「タメ（溜）」をつくってしっかり話し合うことをお勧めしています。

それは、他者理解の発問を通して多面的・多角的に考え、子どもたちの価値観が広がり、対立したりしているところで、急に価値理解を意図した発問をすることでねらいとする道徳的価値に子どもたちを向かわせてしまうことに違和感があるからです。

例えば『心と心のあく手』でしたら、他者理解の発問の後、子どもの実態やその授業の意図によって問い方もさまざまですが、次のような発問をするのが考えられます。

・相手はどちらの親切を望んでいるのでしょうか。

・親切は誰のために行うものなのでしょうか。

・何もしない親切であるのでしょうか。

これらの発問は、これまでは補助的な発問として用意されることが多く、学習指導過程上に※印でいくつか明記されていたと思います。

改めて中心発問について考えてみると、私はこの補助発問が中心発問に近い役割を果たしていると実感することが多いのです。この「タメ」での話し合いが深い学びとなり、自然と教材の世界から離れ出し、より一般化して発展的に考えられるようになっていくのです。そうになると、用意していた価値理解の発問をする必要がなくなることを多く経験しています。

さて、ここまで考えてきた「中心発問」はどれにするのか。どの発問に◎を付けるのか。ますます迷ってしまった方も多いかもしれません。そこで、道徳教育推進教師を中心に、各学校で中心発問の定義を考えてみると、それがよりいっそうの授業改善につながってくると思われます。

思い切って、基本発問や中心発問、補助発問を◎※の印で表記することをやめて、その授業で「考え、議論する」部分を別の方法で明記する表記の仕方でも考えてみるのもいいかもしれません。

（あさみ てつや）

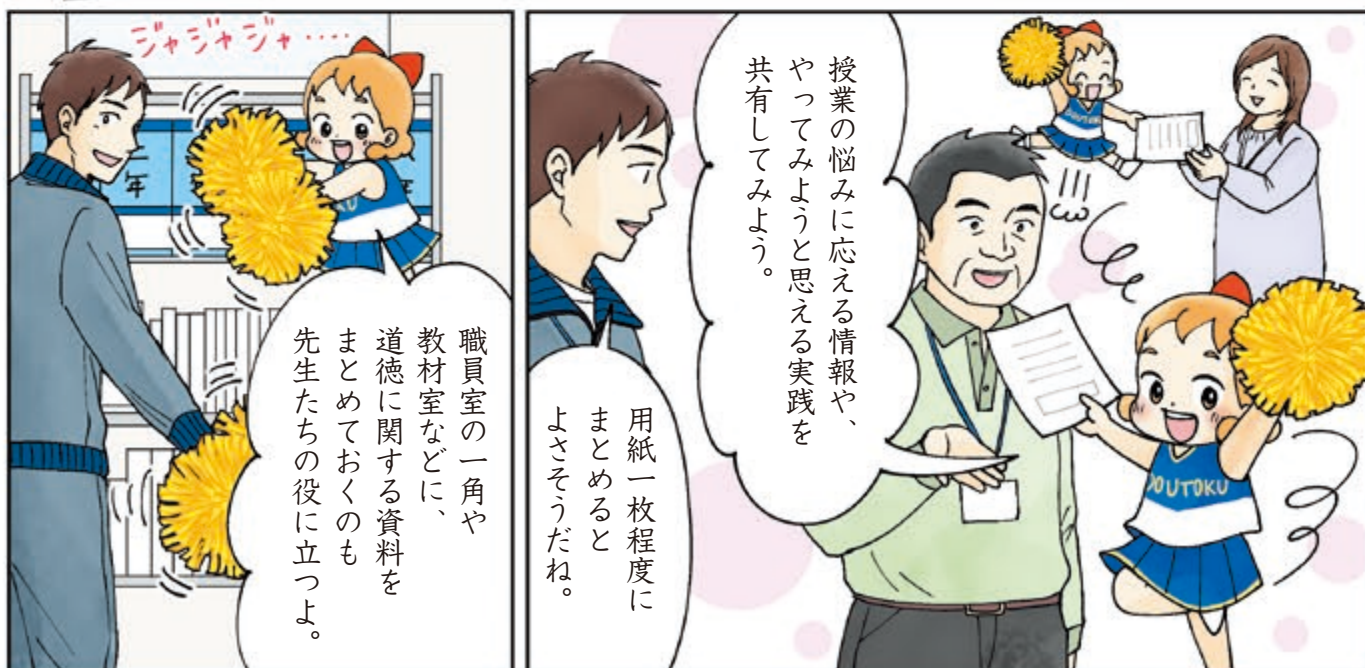
どうなるこれからの道徳授業

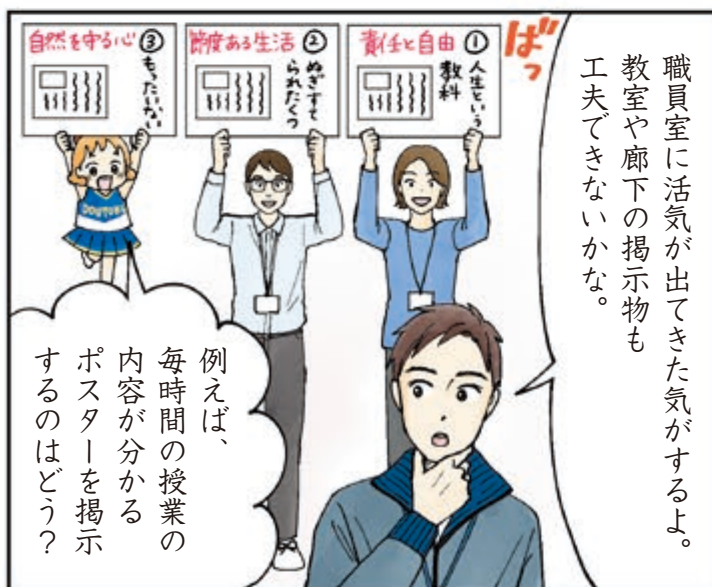
道徳教育推進教師編 その6

とくちゃん

監修・廣瀬仁郎 元法政大学兼任講師
マンガ・のはらあこ

先生





『どうなるこれからの道德授業』が本になりました!!

マンガでわかる道德

すぐできる ずっと役立つ**基礎・基本**

編著

廣瀬仁郎（元法政大学兼任講師）
浅見哲也（十文字学園女子大学教授）
永田繁雄（東京学芸大学特命教授）



A5判・144ページ 定価：1,980円（本体1,800円＋税10%）

品目コード：2380252900 ISBN：978-4-05-802529-1

ご注文は貴校担当のGakken特約販売代理店へお願いいたします。全国の書店、ネット書店でもご購入いただけます。

商品
ページは
こちら！



道德ジャーナル130号 令和8年8月発行

発行所 株式会社Gakken 発行人 竹重純二 編集人 木村昌弘

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL (03) 6431-1565 (編集) それ以外のことは…TEL (03) 6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/> ●『道德ジャーナル』のPDF版はWEBページから。

9300011357



これからも
ずっとともに、
80周年。

Gakken